

めあてを追求する音楽科の授業構成

—2年 合そう「ポンポンピアノ」を通して—

真 田 美智子

1. 低学年におけるめあて追求

私たち大人にとっても同様であるが、特に低学年の児童にとって、物事に対する興味や関心は、次に起こす行動のきっかけになるものである。それだけに、音楽においても、まず、いかに児童の興味や関心を喚起し、それを育てていくかが重要なポイントとなる。しかし、興味、関心がもてさえすればよいかというところではない。表現してみても音楽的な満足感、音楽的な楽しさが味わえるものでなければ、音楽に対する意欲といったものは持ち得ないし、育っていかないだろう。

低学年の児童にとって、めあて追求とは、児童が音楽に対して意欲をもち、教師と共によりよい（より音楽的に楽しい）表現をしていくことだと考える。その経験が積み重なって、児童が関わり合い、創意工夫のある発想を表現活動に生かし、めあてに向ってせまっていく活動をしていく力が育てられていくのではないだろうか。

また、めあて追求の力は、表現の技能や、音楽を感じる心とも非常に深い関わりをもっている。感じることなしには、めあては生まれ得ないし、技能なしには、表現していくことがむずかしいからである。どちらにも片よることなく、音楽学習を進めていく必要がある。

2. めあて追求のための場の工夫

(1) 意欲をもたせる教材との出会いの場

これはもちろん、教材が児童の実態に合っており、音楽的に魅力のあることを前提としたものである。

昨年度より、「めあて意識を育てる」ことをテーマとしてきたが、教材とどのような出会いをするかは、その教材に対して児童が意欲をもつかもたないかに関わってくる。特に、具体的な範唱や範奏により、児童の感性に直接訴え、思わず表現したくなるような気持ちを起こさせたい。この気持ちが、めあてに向かってせまる原動力となるのではないだろうか。

(2) 一時間の活動がとらえられやすい導入

この一時間でどんな音楽活動をするのかが、子どもに具体的にわかるようにする。範唱や範奏視覚に訴える資料や、具体的な指示などが必要である。

(3) 表現への意欲が高まり、達成感の味わえる評価の場

できたかどうか、歌えたかどうか、という観点だけで、子どもの表現をみることのないように気をつけたい。技能は表面上とらえられやすく、意欲にも深い関わりをもっているが、まず、児童が、何を感じとってどのように表現しようとしているのかを見きわめることが大切である。

そして、よい点をほめる評価や、向上の喜びを味わえるような評価の場をもつことを心がけたい。

(4) 児童にとって楽しい活動の場であること

(1)～(3)にも関わる事項ではあるが、音楽は感情が基盤となっている。音楽科の指導の前提条件であるともいえよう。

3. 指導事例 合奏「ポンポンピアノ」

(1) 題材について

①教材について

「ポンポンピアノ」(小林純一作詞, ドイツ曲)は, ハ長調, 4/4拍子, 中間に4小節のメロディが挿入されている拡大一部形式の曲である。この曲に, 「しりとり」という別の題名と歌詞をつけたものもある。

「ポンポンピアノ」につけられている歌詞は, ピアノの音(ポンポン), トントンやタンタンの擬音, ワッシュイやランタンタンのかけ声などがおもしろく使われており, 旋律やリズムとあいまって, 楽しい弾んだ感じがあらわれている。

また, ハ長調であること, リズムが簡単であることから合奏曲として扱いやすい。

②児童の実態

⑦楽器に関する経験(小学校入学からこれまでの経験)

◦すず, タンブリン, カスタネット, 大だいこ, 小だいこの打楽器には, 親しんできている。

◦鍵盤ハーモニカは一年生の頃より学習しているが, 技能的な個人差は大きい。

◦ほとんど, 歌とリズム伴奏の経験である。

①音楽学習の中で, 「2つに分かれて(分担して)歌ったら楽しいと思う。」や, 「ここに楽器を入れてみたい。」という子どもの姿がみられるようになった。また, 友だちの表現を聴いて, 「〇〇さんのリズムはよく合っている。」という発言をする子どももみられるようになった。

③指導にあたっては, 次のことに留意する。

⑦合奏や楽器の範奏(テープや教師の示範)によって, 合奏や楽器の音色に対する子どものイメージや, 活動のめあてを具体的にもたせる。

④子どもの表現に対しては, できるだけよい点をほめる評価に心がける。

⑦いろいろな楽器に親しませるため, 楽器パートを固定化せず, 交代性にする。

④木琴を演奏するのは初めての経験なので(個人的に習っている子どもや幼稚園で経験している子どももいるが), 木琴に親しむ時間を設定する。

④リズム打ちや階名唱が練習のためだけにすることのないようにする。常に合奏につながるように, また楽しい活動の中で習得できるようにする。

⑥音楽の限られた時間以外にも表現が楽しめるように, 楽器を常に教室に設置する。

以上のような留意点の中で, 特に重点をおいて指導したいのは次の2点である。

① 子どもの教材に対するイメージや活動のめあてを具体的にもたせるために, 範唱や範奏を聴かせる。

② 子どものめあてに対する意欲や, 達成感を味わわせるために, 教師の評価や相互評価の場を設定する。

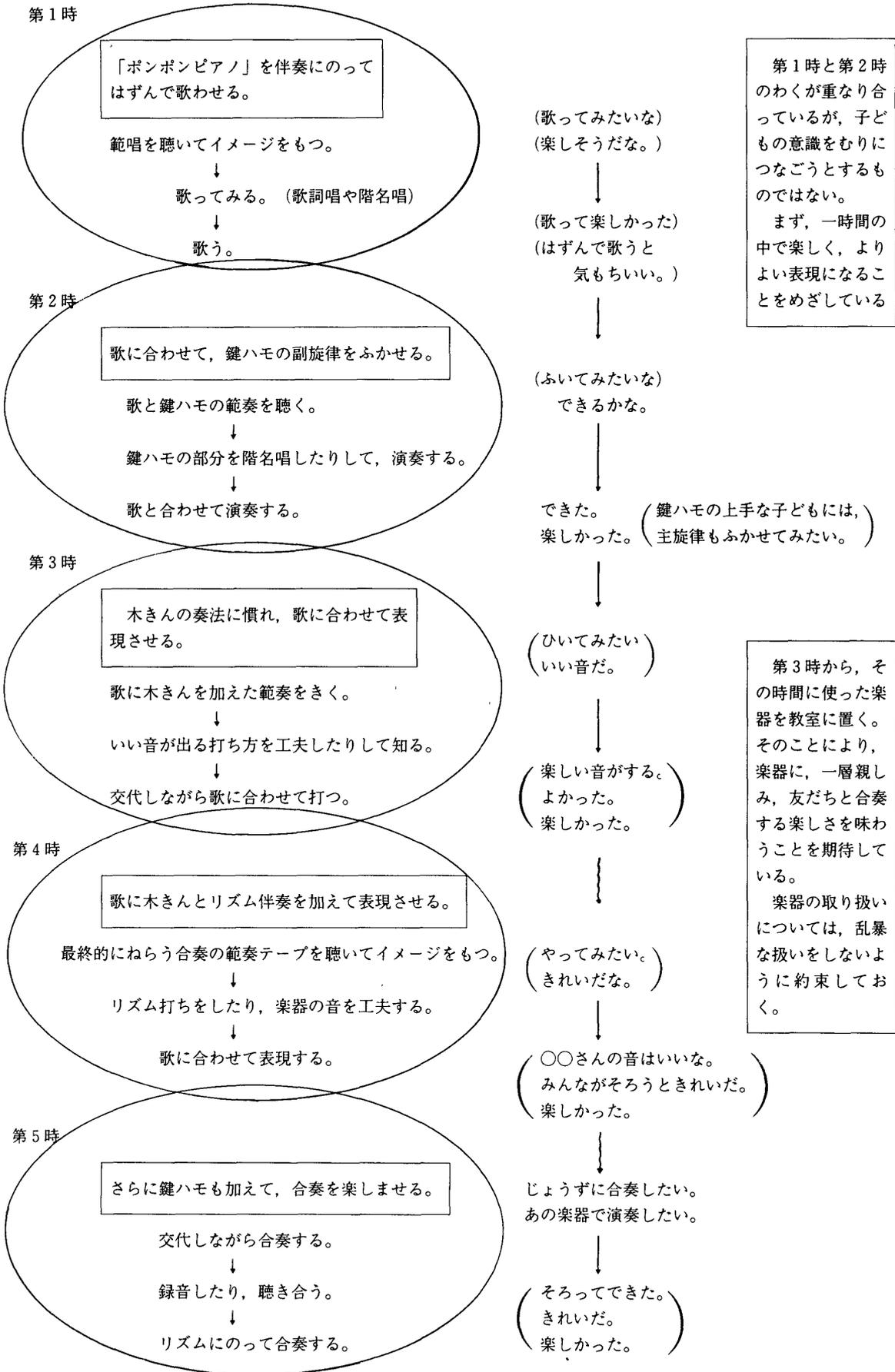
(2) 指導目標

① 合奏する楽しさを味わわせる。

② 楽器(すず, タンブリン, 大だいこ, 小だいこ, 木きん, 鍵ハモ)に親しみ, リズムによって表現する力を養う。

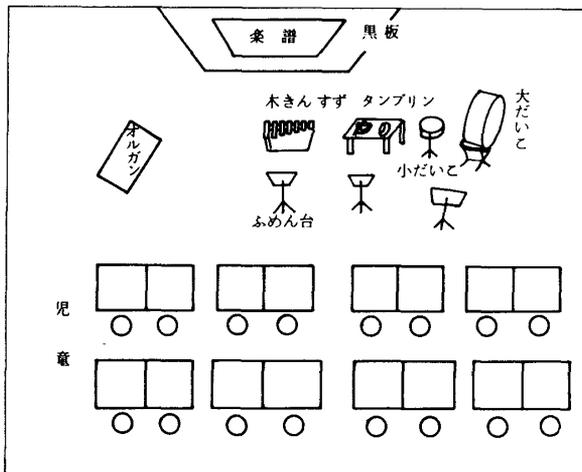
③ 自分の音や他の音を聴いて, 合わせて表現できるようにする。

(3) 題材の指導計画と子どもにもたせたい意識



(4) 指導の展開 (第4時)

実際の合奏への導入である第4時について、くわしく取り上げてみたい。



左図は、楽器の配置を表したものである。

学習形態としては、グループ活動をとらず、一斉の中での指導をとる。これにより、子どもの表現は、常に聴かれることになり、一回一回の評価が、他の子どもに生きることをめざしている。また、演奏する以外の子どもも、聴くだけでなく、歌ったり、鍵ハモをふいたりさせて、参加させたい。

左下の楽譜は、児童に配布したものである。本題材では、合奏の範奏によりイメージをつかませることを指導の重点としているので、楽器やリズムは、あらかじめ決めておいた。

(合奏) ポンポンピアノ
J. 125-128

名歌()

さらに合わせておもう(きたかな)

<ul style="list-style-type: none"> ①...すず ②...タンブリン ③...木さん 	<ul style="list-style-type: none"> ④...小だいに ⑤...大だいに
--	--

- ・すず
- ・タンブリン
- ・小だいに
- ・大だいに

- ・てきさん
- ・木さん
- ・けんハモ
- ・ふめん台

黒板にてん付した楽譜も、児童に配布したプリント同様のものである。

(教科書 音楽之友社 2年より)

T 楽器の準備、楽譜の準備をする。(授業前)

C 楽器に興味をもって、さわったり音を出したりする子どもがいる。

T 「ここにすずやタンブリンなどの楽器があります。これで『ポンポンピアノ』の合奏をしましょう。音が合うととてもきれいですよ。では、その合奏を録音したものをきいてみましょう。」(範奏テープを聴かせる。)(範奏テープは音楽之友社ふろくのレコードを録音したもの)

C とても静かに聴いている。

T 「どうやってけ楽器をならすのか、先生がやってみますよ。まず、すずです。」(歌いながら、すずを打つ。)

C いっしょに歌ったり、すずを打つまねをしている子もいる。

T 「じょうずに打っている人がいますね。みんなでやってみましょう。」

C すずを打つまねをして手首を打つ。まちがえずにできている。

T 「よかったですよ。タンブリンはすずと同じリズムです。やってみます。」(歌いながら、

タンブリンを打つ。)

C 歌に合わせてリズムを打つ。

T 「次は大だいここと小だいこです。大だいこはこう (打つ) 小だいこはこう (打つ) です。」

C 大だいこは足、小だいこは手でリズム打ちをする。よのところで打つ子がいるので、2, 3回くり返す。そのあと、楽譜のプリントを配布する。

T 「では実際に楽器でやってみましょう。大だいこ、小だいこをやりたい人？」

C 大勢挙手

(2人指名する。バチの持ち方ととまどったので、打ちやすい持ち方を教える。)

T 「1, 2, 3, はい……」(Tは歌う。)

C 大だいこの子どもは曲にのって打つが、小だいこの子どものリズムがくずれる。

T 「小だいこリズムはあと打ちでむずかしいね。もう一度やってみよう。」

(今度は小だいこの子どものそばにいて、タイミングをとる。)

T 「今のはうまくできましたね。他にやりたい人。すととタンブリンも入れましょう。」(4人指名)

C 何とかリズムにのれる。大だいこのはじめの音がおくれる。

T 「歌とずれないでできたね。大だいこの人、真中からうまく直せたね。曲が止まらずにつづいたのは、とてもいい音楽ですよ。」

. 木きんも入れてみたい。

T 「木きんも入れてみましょう。はいるタイミングがむずかしいから気をつけてね。」

(5人指名して演奏する。)

C 木きんの音が小さいから、もう少し大きくしたらいいです。

T 「打ったあとバチをはずませると、いい音が出ますよ。」……(しばらく交代して打つ。)

C それぞれのリズムは打てるが、曲の流れにおくれないように、曲の中に入るのが、むずかしいようだ。(教師が「はい」と入るタイミングを指示したり、手で合図をすると、おくれずに入れるようになる。)

T 「だんだん楽しい音楽になってきましたね。今度は楽器だけでなく、歌とも合わせてみましょう。うまく合うと、きれいですよ。」(楽器の子ども5人指名。歌の子どもは起立させる。Tはオルガン伴奏をする。)

T 「歌と楽器の音がいっしょに鳴って楽しい感じがしますね。今度の演奏は録音してみましょう。」

(クラスを2つに分け、半分の子どもの歌と5人の楽器、もう半分の子どもの歌と5人の楽器と、2回録音する。)

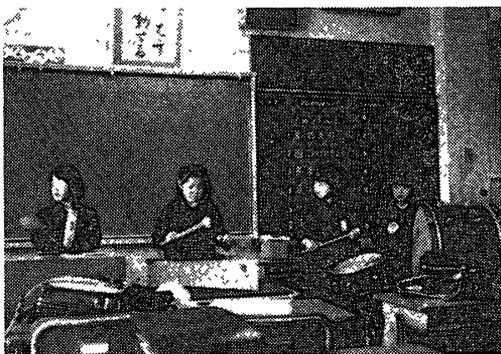
C 始めは「えーっ」と言っていたが、緊張して表現している。録音が終わると聴きたいと言う。聴かせると、「あまり合っていない。」「木きんの音が聞こえない。」という子どもがいた。

授業終了後、今日の音楽は楽しかったかどうか挙手させると、次のようであった。

楽しい 22人 ふうふう 14人 楽しくない 3人

楽しくないと答えた子どもに理由を尋ねると、「楽器があまりさわれなかった」と「あまり音が合わなかったから」であった。

(5) 楽器の設置によってみられた子どもの姿



楽器を設置することで、休憩時間等にも、合奏を楽しむ子どもの姿がみられた。

- 何人かで集まって合奏する子ども。
- 合わせて演奏するために「1, 2の3」と声をかける子ども
- 互いの顔を見合って演奏する子ども
- 楽器の奏法（パチの持ち方など）やリズムを教え合う子ども。（パチの持ち方などが定着していなかったということだが）
- これまでに学習した曲を演奏する子ども

(6) 考察

① 範唱や範奏を聴かせることで、イメージをもたせ、意欲化が図れたか。

本題材では、どの時間も範唱及び範奏を聴かせることでイメージをもたせることをねらっている。「ポンポンピアノ」の範唱、歌に合わせた鍵盤ハーモニカの範奏、木琴の範奏、合奏の範奏である。（このうち、合奏の範奏は録音テープで、それ以外は教師による。）これらは、導入においてまず聴かせているが、一回のみではない。第4時の授業記録にもあるように、すずを打つ、大だいこを打つなどして、何度も聴かせている。それは、他の時間も同様である。一回めの出会いを大事にしながらも、繰り返し聴かせることで、演奏をより明確に把握させたかったのである。

この点について、特に合奏では、これからどんな音楽ができ上がっていくのかを具体的に把握させる上で、たいへん効果があった。

② 教師の評価や相互評価で、意欲化が図れ、達成感が味わえたか。

「歌とずれないでできたね。」「だんだん楽しい音楽ができてきたね。」等、よい点をできるだけ、ほめた。その結果、前に出て演奏する子どもものびのびと表現することができたようである。しかし、第4時の授業で「楽しくなかった」と答えた中で、「うまく合わなかったから」と言った子どもがいるように、達成できなかった点をしっかり把握している子どももいる。技術的に達成しない点については、それが達成できるような適切な助言や励ましが必要と思われる。また、最後に録音して聴いてみた時も、「あまり合っていない。」との発言が多く、反対に、子どものめざす音楽が、はっきりとそれぞれに把握されていたともいえる。どちらにしても、その時間の始めの頃の合奏と比較して、よくなった点を評価する等、向上が意識できるような場にする必要があった。

③ 一時間の活動が楽しい（音楽的に満足できる）ものであったか。

本題材は合奏することをねらいとしていたので、一時間ごとの子どものめあてが持ちやすく、具体的な形として楽器があったので、興味をひきやすかったともいえる。しかし、実際の子どもの意識は「とにかく楽器にさわって音を出したい。」という子どもから、「みんなで合わせてきれいな音楽をつくりたい。」という子どもまで、幅のあるものであった。「とにかく音を出したい」という子どもに、よりよい音を出すことの楽しさや快よさを味わわせることができたかどうかは疑問である。また、合奏では、リズムがうまく打てたか等の技能が目立ちやすく、意欲にも関わる。よい点をほめる評価を心がけたが、まだ不十分である。楽しむ中で、表現力も伸ばしていけるような指導も考えていく必要がある。